学会会長就任のご挨拶

日本ゴマ科学会
会長　吉田元信

日本ゴマ科学会会員の皆様におかれましては、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。昨年鹿児島県霧島市で開催されました第31回日本ゴマ科学会大会において田代先生の後を受けて、会長を仰せつかりました。これまで会長を務められた先生方と異なり、小林貞作、並木満夫両先生が中心となって、日本ゴマ科学会が発足した1986年には、会員のメンバーではありませんでした。しかし、本学会の発展のために精一杯尽くしたいと考えております。会員の皆様には、これまで以上のご指導とご協力をお願い申し上げます。

さて、目を外に転じますと産業界ではIT関連企業が活発で、これまでの産業もITとの連係でIoTとして生まれ変わりつつあります。日本ゴマ科学会も少し装いを新たにできないか、その手始めにホームページを刷新したいと考えております。また、唯一の学会誌であるセサミニュースレターも、ゴマ学会通信として、講演論文、学会会議記事、文献紹介、会員所属の研究機関や会員企業の紹介など盛りだくさんな内容を含んでいます。今一度、内容を整理してみる必要がありそうです。大事な問題としまして、学会の会員数の減少傾向に依然として、歯止めがきいておりません。大学、企業、試験場等それぞれの関係機関で、新しい会員の掘り起しをお願い致します。会員数を増やすためには、やはり日本ゴマ科学会が魅力のある学会でなければなりません。会員の皆様とご相談させてもらいながら、改善できるところは積極的に、変えていきたいと思います。

日本ゴマ科学会関係者が積み上げてきたゴマリグナンの研究成果は素晴らしいものであります。一般の人からも「ゴマと言えば、セサミン」と答えが普通に返ってきます。このことは、日本ゴマ科学会関係者が築いた大きな成果の証のひとつです。ゴマリグナンに続く新しい研究成果を日本ゴマ科学会から、発信して行けますように頑張りましょう。国産ゴマの産地化においても新しい局面を迎えようとしています。現在、地方においては多数の耕作放棄地が出てきており、一方大勢の団塊の世代の人達が停年を迎え、Iターン、Uターンで地方に戻りつつあります。ゴマは、栽培が比較的容易なため、これまでの農業経験が豊富でなかった人々にとっても、格好の作物と思われます。収穫に際しての機械化と収穫したものの販売ルートが出来れば、活発にゴマ栽培に取り組んで行けます。学会を通じて、マッチングのキッカケができ、国産ゴマ産地間のネ

ットワークが形成できればと考えます。

第32回日本ゴマ科学会つくば大会は口頭発表とポスター発表の一般講演と特別講演からなります。特別講演では農研機構・北海道農業研究センターの勝田眞澄所長と南九州大学環境園芸学部の山口雅篤教授より、ご講演頂きます。大会を通じて、会員の皆様方の間で、活発な情報交換が行われることを期待しております。